

2025年8月



# CWS JAPAN NEWSLETTER NO.107

いつもCWS Japanの活動に温かいご支援、  
ご理解をいただき、ありがとうございます

## パキスタン洪水 緊急支援

今年6月末から続くモンスーンの豪雨は、パキスタン全土に甚大な被害をもたらしています。とりわけ北部の山岳地帯、ギルギット=バルティスタン州（以下、GB州）では、氷河湖決壊洪水と集中豪雨が重なり、村々が壊滅的な打撃を受けています。

### 現地の被害状況

この地域はヒマラヤ山脈に抱えられた世界有数の氷河地帯であり、モンスーンによる豪雨に加えて、近年の気温上昇に伴って氷河湖の決壊リスクが高まっています。今シーズンも不安定な氷河湖が度重なる豪雨に耐えきれず決壊し、突発的な鉄砲水が集落や農地、主要道路を押し流しました。7月下旬から8月にかけては、ギザー、シガル、ギルギット、フンザ、スカルドゥなど各地で洪水が相次ぎ、数十の村が「災害地域」に指定され、数千世帯が住居や生活基盤を失いました。

8月中旬のギザー県では、学校や病院、家屋が濁流にのみ込まれ、道路と橋が流されて孤立した集落には支援が届かない状況が続きました。通信や電力の途絶により、外部との連絡すら困難になった地域も少なくありません。山間部の主要幹線であるカラコルム・ハイウェイや灌漑水路も各所で寸断され、住民の暮らしや経済活動は深刻に停滞しています。

パキスタン国家防災管理庁の報告によれば、6月26日以降、パキスタン全体で少なくとも707人が死亡し、967人が負傷しました。住宅は2,900棟以上が損壊し、152の橋と600kmを超える道路が流失、5,000頭以上の家畜が失われています。全国的には数十万人規模が避難し、数百万人が影響を受けていると報告されています。例年9月頃までモンスーンの影響は続くため、さらなる被害の拡大も懸念されています。こうした全国的な被害の中でも、GB州はもともと社会基盤が脆弱でアクセスが限られているため、復旧が遅れやすく、被害の影響はより深刻です。農地や家畜を失った多くの家庭が、今後の生活の見通しを立てられないまま取り残されています。

現地では政府や人道支援団体が必死に対応していますが、被災範囲の広さと被害の大きさに比べて資源は圧倒的に不足しています。避難した人々は安全な水や食料、住居を確保することすら難しく、特に子どもや女性、高齢者など弱い立場に置かれた人々の暮らしは深刻な脅威にさらされています。



河川の増水による河岸侵食で、住宅の土台が流されて損壊した家屋。まるで地震のような揺れが起こり、家の一部が流されたと、避難した住民は報告した。

©CWSA



ギルギット＝バルティスタン地方、フンザ地区にて。  
住宅が水害によって流されてしまったため、  
仮設テントで避難生活を強いられている  
ザヒード・モハメド・カーンさん ©CWSA

### CWS Japanも緊急支援を開始します

CWS Japanはこうした状況を受け、すでに食料や生活必需品の配布などの支援活動を開始している現地パートナー団体と共同で支援活動を行う準備をしています。被災した人々が再び日常を取り戻すために、どうか皆さまの温かなご支援とご協力をお願いいたします。

# CWS JAPAN 支援活動のための ご協力をお願い

CWS Japanの支援活動は、皆さまからの寄付により支えられています。

活動継続のため、ご協力をお願いいたします。

※CWS Japanへのご寄付は、寄付控除の対象となります。

プロジェクト  
最新情報  
ご支援はこちら

# アフガニスタン地震 緊急支援

日本時間9月1日午前4時半頃、アフガニスタン東部ジャララバード近郊を震源とするマグニチュード6.0の地震が発生しました。

震源の深さはおよそ10kmと浅く、特にクナル州やナンガルハール州での被害が大きく、地震により多くの村が倒壊し、死者数1,400人、怪我人が3,100人、全壊した家屋は少なくとも5,400戸と報告されています。(2025年9月3日現在)

現在、同地域では帰還民支援活動を実施していますが、当会および現地提携団体職員の無事は確認できました。

夜間に発生したことによる混乱や、瓦礫に埋もれた家屋や交通の分断、特に山間地域での被害状況の把握が難しく、これから被害規模が拡大することが懸念されています。

当会も引き続き現地との連絡を密に行い、情報収集を継続し、必要とされる支援を届けてまいります。

**プロジェクト  
最新情報  
ご支援はこちら**



# アフガニスタン 帰還民への緊急人道 支援を開始しました

こんにちは、五十嵐豪です。今回は、2025年7月から開始したアフガニスタン帰還民支援について報告します。

アフガニスタン難民の最大の受け入れ国であるパキスタン政府が打ち出した「不法外国人送還計画」や、イランの政府の強制帰還方針の影響で、アフガニスタンへの帰還民が急増しており、2025年4～5月の2か月間だけで50万人以上が帰還したと報告されています。こうした帰還民の91%が、帰還後に必要な食料や水、生活必需品を十分に確保できておらず、人道的支援が急務となっています。



パキスタンから到着した帰還民世帯の家財一式を乗せたトラック。帰還のための費用を捻出するために多くの家財を売却して、ほとんど荷物を持たない帰還民世帯も多くいます。©CWSA

ただでさえ困難な状況にある難民の立場は、難民受入国でも厳しくなり、アフガニスタンへの帰還が始まりましたが、これはアフガニスタンの状況が改善したからではありません。経済的および社会的に困難な状況が続くアフガニスタンでは、逃れるように帰還した人々を受け入れ、十分に支えるだけの体制は整っていません。また「帰還民」という言葉から、よく知った故郷に帰る人々というイメージを持つかもしれませんが、難民の中には、長年にわたり続くアフガニスタンの混乱からパキスタンやイランといった受入国で生まれ育ち、そこでの生活が何年または何十年と続いたため、アフガニスタンでの生活は全く覚えていない、または行ったこともないという帰還民も少なくありません。

そうした人たちにとっては、アフガニスタンは温かく迎え入れてくれる故郷といったイメージとは異なるものかもしれません。



国境地帯では、支援団体によって作られた一時滞在用のテントが並びます。ここで帰還民として登録を待つことになるが、急増する帰還民の数に対して支援は十分とは言えません。©CWSA

CWS Japanはこの状況に対応するため、帰還民が多く居住するナンガルハル県において、緊急食料支援を実施しています。支援では、アフガニスタンにおいて社会的脆弱性が高い女性が世帯主となっている世帯や、障害者のいる世帯、経済的な困窮度が極めて高い世帯などを優先して、2か月分の小麦や塩などの基本的な食材を詰めた食料品バスケットを1,680世帯（約11,760人）に対して配布します。



ナビウラさん(36歳)は9人の家族と共に帰還しました。現在は、ジャララバード市内に居を構えたものの、慣れない環境で仕事も見つけられず、一家は深刻な食料不足に陥る可能性が高まっています。©CWSA

支援の実施にあたっては、地域のコミュニティ委員会や現地提携団体と連携し、できる限り現地の人びとに寄り添った支援となるように実施しています。本支援が、帰還民が困難な状況から立ち上がり、再び地域社会の一員として生活を再建していくための第一歩となることを期待しています。

本事業は、ジャパン・プラットフォームによる助成金と皆さまからの温かい支援に支えられております。さらに多くの人びとへの迅速な支援に繋げるため、皆さまからのご寄付をお願いいたします。

(文：ディレクター 五十嵐豪)

# エンジニアとして 異国の自然災害に 向き合う 防災技術アドバイザー 眞弓孝之

こんにちは、防災技術アドバイザーの眞弓孝之です。大学（広島大学大学院 砂防学研究室）を修了後、国土防災技術株式会社という防災に特化したコンサルタント企業に就職し、そこで36年間勤務しました。昨年、還暦を迎え、人生の第二フェーズを楽しむために退職致しました。現在、個人事業主（防災の樹 Trees of DRR）に基軸を置きつつ、CWS Japanや他のさまざまな人・組織の皆さんと、自然と人とのよりよい関係を目指し、自由な社会貢献を続けていきたいと考えています。今日は、これまでの人生の振り返りと、今後CWS Japanメンバーとしてどのように進むかを言葉にしたいと思います。

## 自然災害に向き合ったコンサルタント時代

これまでのわたしの人生には、羅針盤も、目的地設定もありませんでした。進学も、就職も「これだ」というものを見つけられず、「将来何がしたい」と人に尋ねられることが嫌でした。「自然の摂理」という言葉を好み、社会の欺瞞（ぎまん）や理不尽から距離をとりつつ、自然から学びを得ることで「真理」に近づけると考えていました。

大志を持たないまま、指導教官に勧められるままにコンサルタント企業へ入社し（その時、初めてコンサルタントという業種があることを知りました）、地すべり、崩壊、土石流、洪水と向き合うことになりました。

先に述べた通り、「これがしたい（＝これはしたくない）」が無い、迷走状態のわたしには、会社が求めるどんなタスクも積極的に拒否する理由もなく、ただ「何事も必然であり、神羅万象にはすべからく意味がある」と考える性質が背中を押し、頼まれれば何でも取り組みました。以下、前職時代の略歴です。

松山支店勤務時代（1-2年目）：  
調査ボーリング管理、物理探査、測量、誰もいない森の奥で、懐中電灯を頼りに深夜まで独りで地下水調査。アンカー工事、杭打ち工事、数十メートルの深さまで発破や削岩機を使って井戸を掘る他、各種工事の施工管理に従事。

東京技術本部勤務時代（3-15年目）：  
日本全国の工事現場を飛び回り、地下深部にある地すべりのすべり面粘土を採取。日夜、土質試験・分析・安定解析の技術向上に励みました。土質試験機の新規開発にも取り組み、中国の精華大学との共同研究を進めました。

長崎支店勤務時代（16-22年目）：  
地すべり・土石流・火山災害の調査、観測、対策工設計に従事。観測手法の改良や、林野庁が推進する地すべり対策の新工法開発事業に参画。警戒区域設定業務やコミュニティ防災活動、避難行動シミュレーションゲーム開発に従事。

神戸技術開発センター勤務時代（23-28年目）：  
六甲山全域の断層調査や樹木根系調査、深層崩壊・重力性変形調査と危険箇所抽出、ドローンを活用した航空測量実施と同技術の社内展開に従事。

本社国際部勤務時代（29-36年目）：  
外務省NGO連携、JICA技術協力プロジェクト・単独役務・事業評価業務、ADB案件専門家派遣に対応。グアテマラ、ベトナム、アフガニスタン、ネパール、インド、キルギス、インドネシア案件に従事。



アフガニスタン防災力向上事業での  
地形判読トレーニングの様子 ©CWS JAPAN

## エンジニアの技術と経験で、社会課題を解決する

Landslide engineer（地すべりエンジニア）として、地すべり現象の発生メカニズムを解明し、被害の再発防止・予防対策に取り組んだ前職の締めくくりは、培った技術と経験を海外で役立てるミッションでした。

CWS Japanとも出会うことになる国際部での海外活動は、何もかもが「井の中の蛙、大海の存在を知る」経験でした。国内業務で培ったもの、正しいと信じてきた技術や経験の一つ一つが、検証されている感覚を覚えました。

日本とは、歴史も、風土も、文化も異なる異国の人々が、どのように自然災害に向き合ってきたか。それを知らないまま、日本人が培ってきたさまざまな防災技術を押し付けることが、いかに無意味で、理不尽かを知りました。その一方で、ガラパゴス的進化を遂げた日本の技術力の高さ、それを実現できた日本人の勤勉さ、忘れることのない自然に対する（畏怖と感謝に裏打ちされた）謙虚さと、悲しみ、苦しみを乗り越え、挑戦し続ける「大地の理を知るための探求」の姿勢にも気付きました。それを大いに誇りに感じるとともに、そんな日本人だからこそ、世界の人々に向けて果たせる役割があることを知りました。

CWS Japanとの出会いは、そうした「開眼」が連鎖に続く最中に訪れました。企業とNGO。水と油ほどの違いをもつ、これら二つの組織が一緒に課題解決に取り組む。何を目指すかが先にあっただけではなく、お互いに出ることが格段に広がる確かな予感、お互いの強みが相乗効果を生むに違いないと感じる期待から、何の躊躇（ちゅうちょ）もなく呉越同舟となる選択をしました。

社会課題を見つけ、その解決に向け人を動かし／導く技術に長けたNGOと、自然の理を理解し、その「見える化」や、対処技術に長けたエンジニアとのコラボレーションは、「防災」、すなわち人と自然のより良い在り方、地球上に人類が暮らす上でのマナーを学ぶ取り組みを進める上で、数々の耳目を集める成果を得ました（アフガニスタンでの

「GIS技術を活用した持続可能性を伴う災害危険個所把握の能力向上」、ベトナムでの「コミュニティが主導する洪水対策」など）。

CWS Japanのメンバーとなった今、引き続きエンジニアとしての経験と技術をもって、さまざまなプロジェクトで課題解決の質や持続可能性の向上に寄与するとともに、企業とのコラボレーションをさらに拡大継続すべく、取り組みの意義を各方面に発信したいと考えます。

また、NGOの取り組みが補助事業に主軸を置くがゆえに届きにくい、プロジェクト終了後の対象地へのフォローアップ支援等で、「プチコンサル事業」として派遣アドバイザーを請負い、CWS Japanとしての付加価値を高めていけたらと思います。

そして、自身が草分けとなり、エンジニアたちの活躍の場を創出できれば、各企業からますます大量に輩出されるシニア人材が、生きがいをもって社会貢献できる場の確保にも役立てられると信じます。

CWS Japanのメンバーとしてさまざまな活動に取り組み、それらの一つ一つが世界をどのように変えていくかを考えるだけでワクワクします。皆さん、これからよろしく願います。

（文：防災技術アドバイザー 眞弓孝之）



コミュニティ災害レジリエンス強化事業の一環として訪れたインドネシアにて、現地の方からココナッツをいただきました ©CWS JAPAN

# 戦後80周年に寄せてラ ラと戦後復興

みなさん、こんにちは。CWS Japanの五十嵐望美です。8月といえば、日本では広島・長崎の原爆の日（6日・9日）と、終戦記念日（15日）といった、戦争の出来事に想いを馳せる日が続く時期ですね。

今年2025年は終戦から80年という節目の年を迎えるにあたって、各種報道や展示・イベント等で、かつての戦争に関する様々な特集が生まれ、見聞きする機会も多くなっているかと思えます。

終戦から80年が経ち、戦争を直接知り、経験してきた世代の人口も減少しています。わたしはこれまで、個人的な関心から戦争の歴史について学ぶ機会をなるべく持つようしてきました。祖父母はその経験者であり、孫として直接話を聞ける機会を持てました。しかし、まもなく戦争体験者がゼロになる時代を迎えようとしており、直接話を聞ける最後の世代になるという実感が年々強まっています。

そこで、今回は戦後80周年にあたり、CWSおよびCWS Japanとも関わりの深い、「ララ物資」に関するストーリーを、わたしなりにご紹介したいと思います。このストーリーについては、これまでもCWS Japanのnote記事やウェブサイト等でも詳しく紹介していますので、ぜひそちらも合わせてご参照ください！

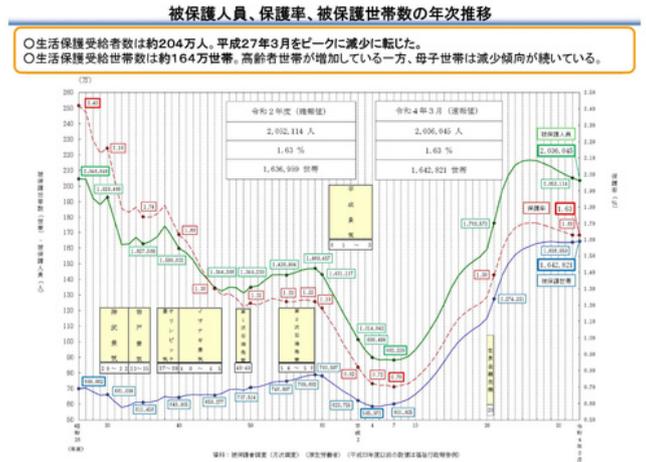


## ララ物資とは？

「ララ物資」と聞いてピンと来ない方も多いかと思うので、当時の時代背景も交えて簡単にご紹介します。

敗戦直後の日本では、多くの人々が深刻な飢餓や貧困に苦しんでいました。現在でいう生活

保護の受給者数は、1947年には約295万人と最多を記録しました。



近年は減少に転じたものの、1992年以降は増加傾向となっており、最新の2025年2月時点では約199万人の受給者がいます。[引用：厚生労働省「生活保護制度の現状について（令和4年6月3日）」]

深刻な貧困状況にあった日本ですが、その後、国全体として目覚ましい発展と経済成長を遂げました。

しかし、ここまで復興を遂げられた背景には、敗戦直後から海外の支援組織や国連などから寄せられた多くの支援物資の存在がありました。「ララ物資」もその一つで、1946年から1952年にかけて、北米のクリスチャン・コミュニティを中心に、日本や朝鮮半島を支援するために寄付によって集められ、贈られた物資でした。

[ニューヨーク日本人歴史博物館のデジタルアーカイブサイト](#)からも当時の写真が閲覧できます。

ララ物資の中身は、主に食料・衣類・医薬品・日用品・学用品などの生活必需品でした。（特に有名なのは脱脂粉乳なんだとか！）その多くは児童を対象とした社会福祉施設に分配され、結果として13歳以下の子どもたちが受け取ることがほとんどだったそうです。当時は、戦争で親や家族を失い、路頭に迷わざるを得なかった子どもたちが数多く存在し、大きな社会問題になっていました（現在でいう「ストリート・チルドレン」ですが、その時は「孤児」や「浮浪児」と呼ばれていました）。

ララ物資についてはかなり広く知られていたようで、受け取った人は約1,400万人（当時

の総人口の15%)にも上ったといわれています。敗戦直後を子どもとして過ごしたわたしの祖父母世代の方にお話を聞くと、物資を受け取った記憶や「ララ物資」という名前を覚えている方がいらっしゃるそうです。

## ララ物資とCWS/CWS Japan

そんなララ物資を送っていた複数の北米キリスト教系団体のうち、出資の約50%を担っていたのが、現在のCWS（アメリカ本部）でした。CWSはその立ち上げ当初から、敗戦後の日本を支える活動に関わってきました。また、北米周辺地域に暮らす日系移民コミュニティも、この活動に中心的な役割を果たしていたことも明らかになっています。

戦時中、日本とアメリカは敵国同士として各地で熾烈しれつに争っていたことはご存知のことかと思います。その影響で、アメリカで暮らす日系人も「敵性外国人」として強制収容されるなど、両国の関係は非常に悪化していました。

しかし、そのような戦争の時代が終わりを迎えてまだ1年しか経っていない時期にもかかわらず、アメリカからも日本へ大規模な支援物資を複数年にわたってこれだけ送り届けられたのは、人々の善意やクリスチャン・コミュニティの信仰に根ざした想いが、大きく後押ししたのではないのでしょうか。

参考：

[BuzzFeed「【写真で振り返る】アメリカにあった日系人収容所ってどんな感じだったの？」](#)

↑

また、こうしたストーリーを知った時に、わたしが思い浮かべたのは2011年の東日本大震災の時に、世界各国から支援の手が差し伸べられた場面でした。

そして、CWS Japanが震災復興支援をきっかけに、再び人道支援団体として立ち上がった背景を考えると、戦争と災害は同じ事象ではないものの、敗戦直後に国籍・人種を超えて人々が連帯して戦後復興に取り組んだという想いと、重なる部分もあると感じます。

## 戦後80年、受け継ぐ記憶とこれから

わたしはもともと戦前戦後の歴史に関心があり、CWS Japanに入職する前の大学院生の時にもアメリカの歴史や戦後史・移民史などを中心に学んでいたため、このララ物資とCWS Japanのストーリーはとても興味深いものでした。

終戦から80年経った今、当時の出来事はますます「過去の歴史」として遠のいてしまうことが想像されます。しかし一方で、世界では今も各地で戦争や災害が絶えず、日本に暮らしていても災害だけでなく、戦争を身近に感じる機会も増えているかもしれません。

だからこそ、これまでの戦争で起きた事実から目を背けず、振り返ることも必要です。そして同時に、当時の人々がそこからどのように復興してきたのかを学び続けることは、これからも大切なプロセスだと感じます。

CWS Japanとしても、そしてアジア地域の国際協力・人道支援に携わる日本チームの一員としても、過去の歴史に眠るさまざまな教訓をこれからの活動の糧にしていきながら、今取り組む人道支援の働きにも向き合っていきたいと思います。

みなさんにとっても、それぞれの立場から、戦後80年という節目のこの時を共に考えるひとときとなりますように。

(文：プロジェクト・オフィサー

五十嵐望美)

# ボランティアを通して 感じた、人と人との 緩やかな繋がり コミュニティが生まれる 瞬間に触れて

新宿区・大久保エリアで展開するコミュニティ・カフェ@大久保では、ボランティアの皆さんが活動を支えています。コミュニティ・カフェ@大久保で5か月ほどボランティアをしていた古田真帆さんより、この活動を通して得られた学びについて、noteにご寄稿いただきました。

## ボランティアのきっかけ

わたしは就職を機に上京し、3年ほど機械部品メーカーで働いていました。一方、大学でオーストラリア留学をした際に自身が「外国人」となる経験をしたことから、日本に住む難民や外国にルーツ持つ方々の支援に興味を持ち、「難民・移民フェス」のお手伝いや、ミャンマーにルーツを持つ方々の支援団体「アトウトウミャンマー」の活動などに参加していました。

このコミュニティ・カフェの存在も前から知りつつも、勤めていた間は平日に参加することが難しく、この度、大学院進学に向けての準備期間があったため3月から7月頃までボランティアとして参加しました。

## ボランティアを通しての学び コミュニティの生まれる過程

「毎回コミュニティ・カフェに来ることがとても楽しかった！」というのが一番の感想ですが、学び形式のイベントでは、「難民への日本語支援」や「タンザニアの文化」「大久保コリアンタウンの歴史」など、その道のプロフェッショナルからたくさん新しいことを学びました。体験型イベントの「コラージュアート作成」や「スリランカカレー作り」では、作業をしながらも、他の参加者である留学生や主婦、またさまざまな職業の方、仕事をリタイヤされたシニアの方など、普段関わることのない皆さんとお話しをすることができ楽しかったです。

例えば、シニアの方は現役時代のお仕事の話をしてくださったり、学生さんは研究テーマやなぜそれに関心をもったかご自身の経験を教えてくださいと、一人ひとりの歩みを知ることができ、とても豊かな時間でした。

そして、このように一度お話をすると、次からは顔見知りになり、挨拶や世間話をしやすくなります。そうやって緩やかな繋がりが生まれ、コミュニティになっていくのだと、コミュニティ形成のプロセスを体験できたように思います。その場にいつものメンバーとしていたることの大切さを知りました。

コミュニティとは一度でできるものではなく、時間をかけて生まれる緩やかな人同士の繋がりであり、その存在が何か困ったことなどが起きた時に「助けて」と言える、頼れる場所になるのかなと思いました。今は新大久保のあたりにも、孤立したお年寄りや外国の方が多いと聞きます。これからこの場がさらに、地元の学生やシニア、外国ルーツの方、主婦/主夫が集う場所になれば良いなと思います。



難民の日に合わせてアートコラージュ作品を作りました©CWS JAPAN

## これからについて 人の繋がりを大切にしたい経済活動を目指して

9月からオランダの大学院で「持続可能なビジネス」について学ぶ予定です。特に、グローバル資本主義が進む世の中で、株主への利益の最大化を目的としない、環境や人間を大切にしたいオルタナティブな経済活動としての「社会的連帯経済」などについて学びたいと思っています。労働者や市民の協働、民主的な運営を大切にしたい経済活動のあり方を探りたいです。改めて、このコミュニティ・

カフェで学んだ「人と人の緩やかな繋がり」は、一人一人にとってお金には変えられない資産であり、持続可能な暮らしに欠かせないものだと思います。皆が取り残されることなく、豊かに暮らせる社会のため、新たに学んでいきたいと思えます。

(文：コミュニティカフェ・ボランティア  
古田真帆)



筆者提供 ©CWS JAPAN

## さまざまなSNSで 情報をお届けしています

CWS Japanでは各種SNSで、日ごろから情報をお届けしています。お好きな方法で最新情報をぜひチェックしてみてください



各種SNSは  
[ここをクリック](#) or  
QRコード読み込み

認定NPO法人CWS Japan @Japan\_CWS · 8月29日  
<「暑中見舞い作り」と「日本語学習×地域参加ワークショップ」>  
皆さん、こんにちは！CWS Japanの五十嵐望美です🍀まだまだ暑い暑さの日が続いていますね。  
今月もコミュニティ・カフェ@大久保 (@commucafes2023) のレポート記事をお届けします👉



note.comから

< cws\_japan

認定NPO法人CWS Japan

684 投稿  
1,254 フォロワー  
2,084 フォロー中

CWS Japanは国内外で災害対応・防災支援をするNPOです。2011年の東日本大震災を機に、日本での活動を開始しました。  
災害時に支援の手が届かず取り残される人々を... 続きを読む  
[linktr.ee/cwsj](https://linktr.ee/cwsj)

@ cws\_japan

パキスタン洪水 緊急支援への ご協力をお願い	アフガニスタン地震 緊急支援への ご協力をお願い	「暑中見舞い作り」と 日本語学習×地域参加ワークショップ 8月のコミュニティ・カフェ@大久保
------------------------------	--------------------------------	--

CWSJapan

CWS Japanは国内外で災害対応・防災支援をするNPOです  
🌐2011年の東日本大震災を機に、日本での活動を開始しました。  
毎週金曜日に団体の活動や職員の想いを載せた記事を配信しています📣

# 「暑中見舞い作り」と 「日本語学習×地域参加 ワークショップ」 8月のコミュニティ・ カフェ@大久保

皆さん、こんにちは！CWS Japanの五十嵐望美です。今月もコミュニティ・カフェ@大久保のレポート記事をお届けします。

## 日本語学校生と暑中見舞い作りを体験！

8月第1週目のカフェでは、友国際文化学院で日本語を学ぶ留学生の皆さんとの国際交流企画として、「クラフトカフェ-暑中見舞い-」を開催しました。

を描いたユニークなものまで、色とりどりでした。

とても賑やかで楽しいカフェになり、夏の素敵なスタートをきることができました！



当日は初めてカフェに来てくださった方も多く、留学生との交流の時間を楽しんでくださったようでした ©CWS JAPAN



さまざまな個性的な絵葉書が出来上がりました！  
絵だけでなく、母国の言語で言葉を書いている方もいました ©CWS JAPAN



中国・ベトナム・ミャンマーなど出身の留学生13名が来てくださり、日本の文化として「暑中見舞いを書いてみよう」というテーマのもと、絵葉書づくりをしました。

色鉛筆や絵筆を使って夏をテーマにしたものをそれぞれ描きながら、少しずつ会話が弾み笑顔が増えていく皆さんの様子がとても印象的でした。出来上がった作品は、花火やスイカ、海など日本の夏を思い起こすようなものから、オリジナルの言葉や個性的なイラスト



最後に全員で記念撮影 ©CWS JAPAN

## 日本語学習×地域参加で学び合いのワークショップ

8月第3週目のカフェでは、地域の日本語教育をテーマに再び和田貴子さんをゲストにお迎えし、ワークショップを交えながら、学びの時を持ちました！

## 2025/8/20 日本語学習×地域参加



今回は日本語学習者であり、ろう（聴覚障害）者である方のケースをご紹介いただき、その方にとっては日本語に対するハードルだけでなく、かつて手話ではなく口話を強制されてきたことによる後ろめたさといったハードルがあることについても知る機会になりました。

また、日本語学習において学習者が「支援を受ける人」という立場ではなく、対等に役割を持って学ぶことができる場づくりや、地域参加においても地域社会に暮らす一員として地域に関わる場があることの大切さについて確認し、従来の形式的なアプローチではない新たな場が求められていることを学びました。



和田貴子さんをお迎えして開催する学び合いのセッションは今回で3回目！参加者の皆さんとのワークショップを交え、学びの深い時間でした！

©CWS JAPAN

その後のワークショップでは、何人かの日本語学習者のケースを見て、どういった場があればその方にとって地域参加のきっかけになるのかについてグループごとに考えて、共有も行いました！

日本語学習に関わったことのある方から、そうでない方まで、とても活発な議論と学びの多い機会になりました。

今後もカフェでは日本語教育・学習をテーマにした学び合いのセッションを継続して開催する予定ですので、引き続きぜひご参加ください！

## 9月のカフェ企画のお知らせ

9月のカフェは、通常通り、第1水曜日・第3水曜日の営業です。

9月3日（水）のカフェでは、日本語学校生対象の企画のため、一般の方はご参加いただけません。ですが、カフェは通常通りオープンしていますので、作業や歓談など涼めるフリースペースとしてぜひご利用ください。

日時：毎月第1・3水曜日 13:00-17:00  
場所：日本福音ルーテル東京教会  
東京都新宿区大久保1-14-14（JR新大久保駅から歩いて5分）

営業日	イベント企画
9月3日（水）	大久保多文化共生防災まち歩き （日本語学校生対象）
9月17日（水） 13:30-16:00	タイ伝統工芸体験！幸運を呼ぶ 「プラータピアン」を作ろう （参加費無料・事前申込不要）

※イベントの内容・日程は事前のアナウンスなく変更する可能性がありますのでご了承ください。

最新情報はSNSでお知らせしています！

QRコード：Facebook, Instagram, X, 公式サイト

また、9月第3週目のカフェでは、『タイ伝統工芸体験！幸運を呼ぶ「プラータピアン」を作ろう』を開催します！

タイの伝統的な手工芸「プラータピアン (ปลาตะเพียน)」をご存知ですか？  
ココナッツの葉やパームの葉を使って編む、魚の形をした飾りで、幸運・家族の繁栄を願う縁起物です。初めての方でも大歓迎！一緒に楽しく作ってみましょう。

コミュニティ・カフェ@大久保の各種SNSはこちら。  
[Facebook](#) / [Instagram](#) / [X\(旧Twitter\)](#)

(文：プロジェクト・オフィサー  
五十嵐望美)



**タイ伝統工芸体験！**  
幸運を呼ぶ「プラータピアン」を作ろう

2025.9.17(水) 13:30-16:00  
参加費無料・事前予約不要・出入り自由

会場：日本福音ルーテル東京教会  
東京都新宿区大久保1-14-14  
JR新大久保駅から徒歩5分

タイの伝統的な手工芸「プラータピアン (ปลาตะเพียน)」をご存知ですか？  
ココナッツの葉やパームの葉を使って編む、魚の形をした飾りで、  
幸運・家族の繁栄を願う縁起物です。

初めての方でも大歓迎！  
一緒に楽しく作ってみましょう🌟



主催：コミュニティ・カフェ@大久保  
問い合わせ： CWS Japan (牧)  
03-6457-6840、  
[public@cwsjapan.jp](mailto:public@cwsjapan.jp)

 日本福音ルーテル協会  
Wesley Center

  
 @commucafe2023

9月も引き続きコミュニティ・カフェ@大久保にお立ち寄りください。

特定非営利活動法人CWS Japan  
〒169-0051  
東京都新宿区西早稲田2-3-18  
日本キリスト教会館25号室

メールアドレス：  
[public@cwsjapan.jp](mailto:public@cwsjapan.jp)  
電話：  
03-6457-6840



[CWSJapan](#)



[@Japan\\_CWS](#)



[cws\\_japan](#)